KARA-TEPE 2015

—立正大学ウズベキスタン学術調査速報—

RISSHO University Museum

ごあいさつ

ウズベキスタンの東南部のスルハンダリヤ州に所在するカラ・テペ遺跡は、中央アジアを代表する仏教遺跡として著名なものであり、既に半世紀を越える調査歴を有しております。仏教系大学である立正大学は、インドに発しシルクロードを経由して中国に至り、日本に伝播した仏教の展開過程を明らかにするという目的を掲げて、2014 年度からカラ・テペ遺跡の調査を進めております。

遺跡はアフガニスタン共和国との境をなす、西流する大河アムダリヤに面しており、１～３世紀代のクシャーナ朝を盛期として造営されております。遺跡は三つの丘により構成されており、南丘と西丘では、地山の砂岩を掘って構築された洞窟寺院を特徴としています。一方、立正大学が調査を継続している北丘には、地山に日干しレンガを積み上げて構築した大規模な仏教伽藍が所在しており、30 m規模の中庭と周囲に配置された僧房からなる僧院を中心として、北・東・南側には方形基壇を有する大形の仏塔がともなっております。調査は僧院の西側の回廊部の発掘を進め、時期的に先行する僧院が存在する可能性を明確にしました。

また、至近の距離に所在している２世紀代に構築されたと考えられている 20 m規模のズルマラ仏塔において、保存・修復のための基礎的な調査も開始しました。

今回の展示では、2015 年度の調査内容と成果を簡潔に紹介します。立正大学が遂行している重要調査の現状を理解して頂ければ幸いです。

平成 28 年６月

博物館担当副学長　文学部教授　池上 悟

目次

ごあいさつ／目次／凡例

１．カラ・テペ遺跡の概要 …… 1

２．調査の成果 …… 3

３．カラ・テペの周辺遺跡 …… 10

凡例

（１）本図録は、立正大学博物館：第８回品川キャンパス展示パンフレットとして作成しました。

（２）本図録の作成は池上悟（立正大学博物館担当副学長　文学部教授）の指示により、池田奈緒子（当館非常勤学芸員）が担当しました。

（３）本図録の作成にあたり、引用・参考とした文献は巻末に掲げました。

（４）本展示及び図録図 55・57 掲載の土器片は、テルメズ考古博物館より学術研究のために寄贈されたものです。

（５）本展示の開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。

安田治樹（立正大学仏教学部教授）、高橋堯英（立正大学仏教学部教授）、
手島一真（立正大学仏教学部教授）、岩本篤志（立正大学文学部准教授）、
立正大学ウズベキスタン学術調査隊

1．カラ・テペ遺跡の概要

カラ・テペ（Kara-Tepe）遺跡は、ウズベキスタン共和国の南東端部を占めるスルハンダリヤ州の州都テルメズ（Termez）郊外に立地する、古代バクトリア地方における代表的な仏教遺跡です。このバクトリアの地は、７世紀の中国僧である玄奘が訪れたということが『大唐西域記』に記されています。

遺跡はテルメズ市街地の北西郊外の、古テルメズ都城址外の西北部分に位置し、南に隣接するアフガニスタン・イスラム共和国との国境である大河アムダリヤ（Amdar'ja）の北岸に占地しています。

カラ・テペ遺跡は南北 420m、東西 250m 規模の丘上に展開した遺跡です。その地形により大きく南丘、西丘、北丘に区分されており、それぞれの丘に遺構が確認されています（図３）。南丘と西丘は、砂岩層を掘削して築かれた洞窟と、その前面に日干しレンガで築かれた施設との複合遺構を特徴としています。北丘は、日干しレンガで築かれた僧院とその周囲に大形仏塔３基が存在しています。

カラ・テペ遺跡の発掘調査は、1937 年に E.G.Pchelina によって開始されました。1961 年以降には B.Y.Stavisky による継続調査が実施されて多大な成果を挙げています。ソビエト連邦時代による調査成果は、1960 ～ 1970 年代にかけて６冊の報告書として刊行されています。その後も、フランスや韓国など各国の調査隊が調査を続けています。

立正大学ウズベキスタン学術調査隊は、2014 年より当遺跡の発掘調査を開始しました。調査地点は、北丘に構築された仏教伽藍のうち中心部に位置する僧院の西側回廊部分です（図４）。

北丘に構築された僧院は、東西 45m、南北 50m の大規模なものです。僧院の中央部には、東西 20 m、南北 18 mの方形の中庭があり、周囲を隔壁で囲まれています。外側には、幅３mほどの回廊がめぐっています。この回廊に面して北側、東側、南側の３方には多数の僧房が配置されています。また、僧院の北側と東側および南側に、日干しレンガを構築材として使用した大形の仏塔が配置されています。遺構が構築された北丘全体の範囲は南北 100m に及んでいます。

この３基の大形仏塔は、いずれも東西方向に主軸を採っています。これらは複数回に及んで改築されたものですが、少なくとも東側仏塔（Stupa-C）は東側に入口を設けた僧院と一体となって、企画・改築されたものと考えられます。

図１　ウズベキスタン共和国の位置

図２　テルメズの位置

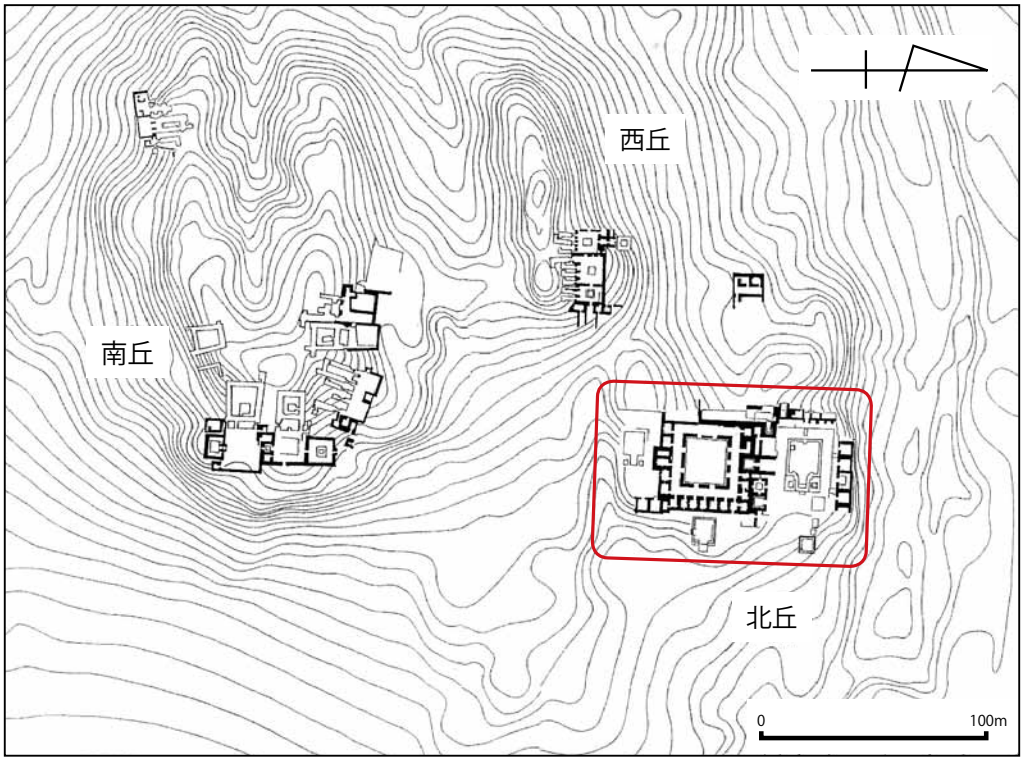

図３　カラ・テペ遺跡全体図

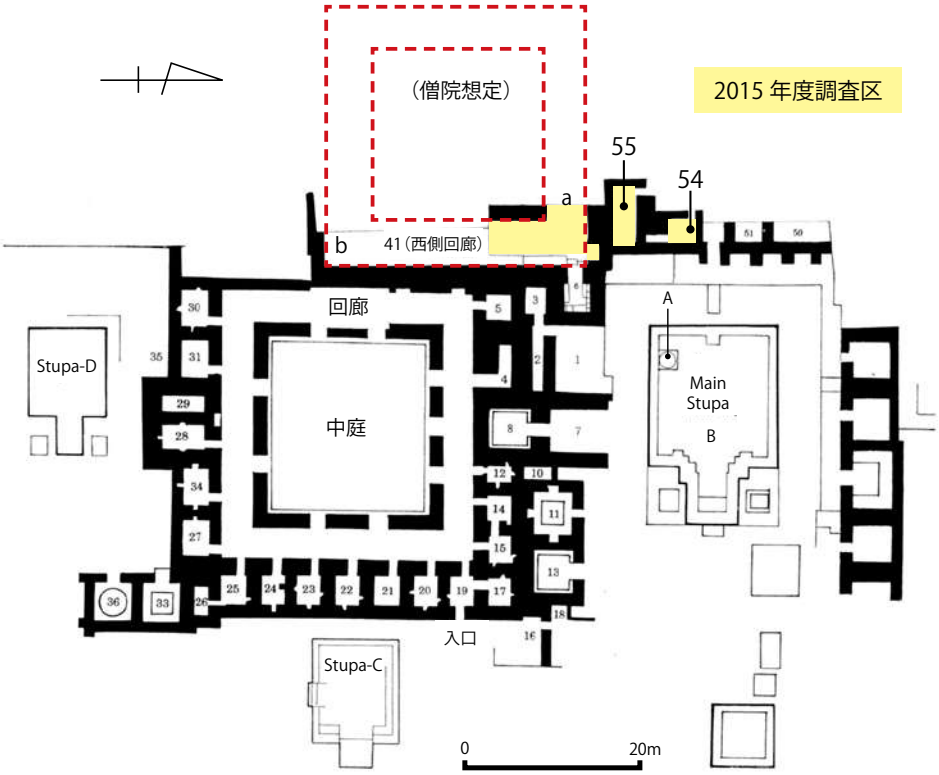

図４　カラ・テペ遺跡北丘伽藍全体図と 2015 年度調査区

2．調査の成果

遺構の状況

昨年に引き続き遺跡北丘に構築された伽藍のうち、僧院の西側に隣接する回廊部分を対象として、2014 年度調査区を西側及び北側へ拡張して発掘を進めました。

この結果、日干しレンガによって南北方向に構築された回廊の西壁の存在を確認しました。これにより、回廊の幅が 540㎝であることを明確にすることができました。確認できた西壁は、東壁と同じく下半部分の表面に壁土を塗り、この上には赤彩が施されていました。上半部は積み上げた日干しレンガが露呈しており、積み直しの状況を確認することができました。

また、幅 540㎝の回廊は、北端において同じ幅で西側へ直角に屈曲していることがわかりました（図 4 a）。この回廊は、北端から南側に 33m のところに、回廊の南側への延長を止める日干しレンガを積み上げた壁が、東西方向へ構築されています（図 4 b）。これらの点を合わせて考えると、現在所在が明らかになっている僧院の西側に 33 m四方規模の別の方形僧院の存在を想定することができ、極めて重要な成果といえます。

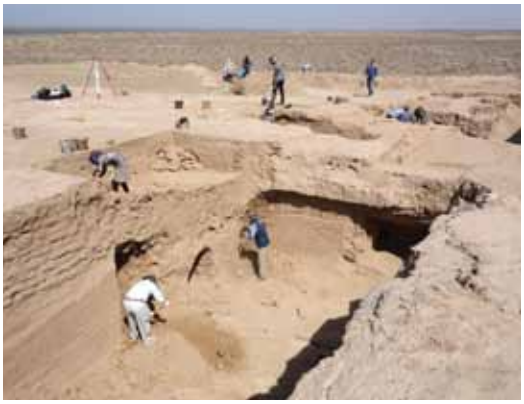

図 5　No.41（西側回廊）調査の様子（1）

図 6　No.41（西側回廊）調査の様子（2）

図 7　No.54 室 調査の様子

図 8　No.55 室 調査の様子

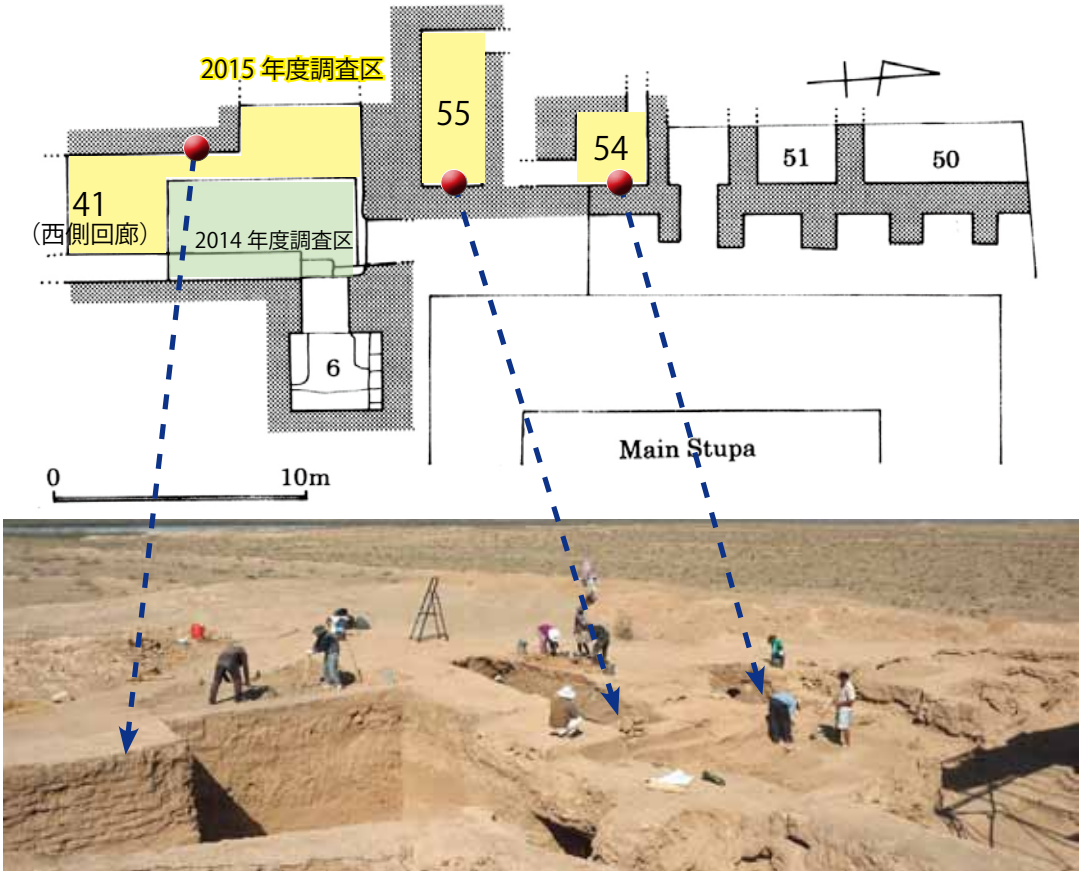

図９　2015 年度調査区

さらに今回の調査では、西側回廊（No.41）の北側、北側仏塔（Main Stupa）の西側の僧院部分にあたる、No.54 室と No.55 室の掘下げも実施しました。

No.54 室は１辺 290㎝ほどの正方形の僧坊であり、北西隅に入口を設けています。南東隅には底面に焼レンガを敷いた大型の龕（がん）を設置しています。天井は陥没して残っていませんが、天井の底痕から壁面の高さは 230㎝と確認することができました。この壁面には、日干しレンガの表面に壁土を塗り、彩色を施しており、彩色は床面 120cm 以上は白色、以下は赤色に塗り分けられていました。

No.55 室は、南北の幅 240㎝を測る東西方向に長く構築された僧坊です。仏塔側である東側壁には、床面から 120㎝上位に付設された幅 90㎝の窓状の施設と小形の龕が確認されていました。このほか小形の龕は、掘り下げが終了した部分で、北壁に２箇所、南壁にも１箇所確認できました。壁面は、日干しレンガ表面に塗布された壁土がほぼ全体的に遺っていました。床面は、西側の 280㎝ほどの範囲で確認したのみですが、一部には焼レンガを敷いた状態を確認することができました。室の東寄りの堆積土下層からは、埋葬された人骨が上下２層に確認されており、コインや土器などの副葬品も出土しました。この人骨は放射性炭素年代測定により、寺院廃絶後の６世紀後半から７世紀前半の年代が得られています。

出土遺物

昨年の第１次調査に比較すると、豊富な出土遺物が確認されました。多くは No.41（西側回廊）の堆積土中から見つかりました。

石灰岩製彫像類は、人物像の頭部、ガルーダの頭部片と脚部分の破片、柱頭飾りなどがありました。人物像の頭部は、高さ 10.6cm、幅 7.8cm の破片です。両眼は大きく、顎ひげが豊かに表されています。蓮弁を刻み込んだ柱頭飾りは、最大径 2.3cm、高さ 11.5cm を測ります。

土器類は、皿、椀、鉢、壺、甕などがあり、多くは破片として出土しています。数点は全容が窺えるものもあり、その中には、小形の灯明具として使用された皿も認められました。

また、文字を墨書した土器片が４点出土しました。このうち２点がバクトリア語で記されており、墨書文字の解読により、１点は両親の為に寺院に捧げられた壺であることが分かりました。なおバクトリア語とは、古代バクトリア（北部アフガニスタン）のイラン系言語で、クシャン期（１～３世紀）の貨幣などの銘文にも使用されています。

土製品は、蓋と思われる円形土板の破片が２点出土しています。直径は弧より 38cm に復元することができます。表面には丁寧に文様が施されています。

金属製品は、コインが３点出土しており、うち２点が No.55 室で検出した人骨に伴うものです。埋葬に伴う儀礼に用いられたものと想定することができます。

図 10　ガルーダ像脚部出土状況

図 11　人骨出土状況

図 12　過去の調査で出土した土器片

（表）

（裏）

図 13　伝テルメズ出土コイン (参考)

直径 2.7cm の銅貨です。
表はクシャン朝の王ヴィマ・カドフィセス２世、
裏は雄牛ナンディの前に立つシヴァ神の図柄です。

KARA-TEPE

図 14　メインストゥーパ（B）

図 15　メインストゥーパ（A）

図 16　僧院中庭

図 17　僧院回廊

No.41（西側回廊）

図 18　発掘状況（北側）

図 19　発掘状況（南側）

図 20　回廊西壁

図 21　西側屈曲部分

No.54

図 22　発掘状況（西側）

図 23　発掘状況（西側入口部）

図 24　発掘状況（南側龕）

図 25　南側龕内の焼レンガ検出状況

No.55

図 26　発掘状況（西側）

図 27　南側壁

図 28　焼レンガ検出状況

図 29　人骨検出状況

カラ・テペ遺跡〈遺物〉

図 No.　資料名称
出土地点（最大値 cm）

30　石灰岩製人物像頭部
No.54（10.6）

31　石灰岩製ガルーダ像頭部
No.41 西側回廊北端部（13.3）

32　石灰岩製ガルーダ像脚部
No.41 西側回廊北端部（12.0）

33　石灰岩製柱頭飾り
No.41 西側回廊北端部（23.0）

34　塑像装飾部破片
調査区北端部（7.8）

35　石灰岩製装飾品破片
No. 55（10.0）

36　青銅製コイン
1：No.55（3.1）　2：No.55（1.9）
3：No.54（1.2）

37　青銅製品
No. 55（5.0）

38　型
No.41 西側回廊（3.3）

39 墨書土器片（壺・肩部）
（7.0）

40 墨書土器片（壺・肩部）
（6.8）

41 墨書土器片（頸部）
（6.5）

42 墨書土器片
（6.0）

43 土製品破片（蓋）
No. 55（復元 38.0）

44 土製品破片（蓋）
No.55（復元 38.0）

45 土器片（壺・把手）
No.54（13.0）

46 土器片（壺形）
（11.2）

47 土器片（壺）
（12.2）

48 土器（灯明皿）
（9.6）

3．カラ・テペの周辺遺跡

カラ・テペ遺跡の周辺には多くの遺跡が点在しています（図 53）。ここでは 2015 年度の調査で訪れた、ファヤズ・テペ（Fajaz-Tepe）、ズルマラ仏塔（Zulmara-Stupa）、カンピル・テペ（Kampyr-Tepe）の 3 ヶ所の遺跡を紹介します。

ファヤズ・テペ（Fajaz-Tepe）

ファヤズ・テペ遺跡は、カラ・テペ遺跡の北側約 1km の低い丘上に位置しています。規模は、南北 200m、東西 200m です。南に階段を有する仏塔と、この西側に配置された僧院と付属施設からなる伽藍です。

仏塔は一辺 18m の方形基壇の上に径 7m の円形塔婆を構築しています。仏塔の西側には、幅 34m、長さ 118m の南北に長い僧院があり、中央の区画は中庭があります。中庭の周囲には僧坊を配置しており、この南側と北側にも同規模の区画が付設されています。

また、僧院の祠堂内からは石灰岩製の仏坐像が出土しています。現在は、ウズベキスタン国立歴史博物館に展示されています。

図 50　ファヤズ・テペ

図 51　仏塔

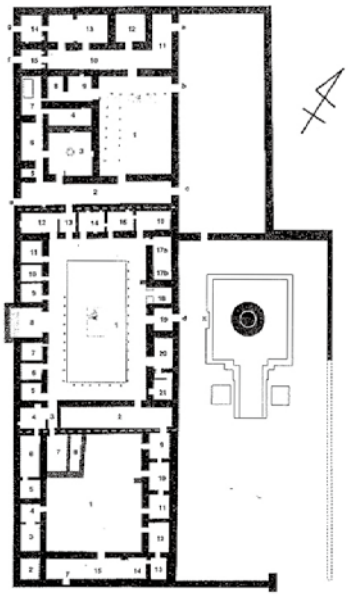

図 49　ファヤズ・テペ伽藍全体図

図 52　祠堂出土 石灰岩製仏坐像

図 53　カラ・テペ周辺遺跡位置図

ズルマラ仏塔（Zulmara-Stupa）

テルメズ市から北西に約 7 km に位置しています。22m × 16m の方形基壇の上に、円形仏塔が日干しレンガを構築材として建立されています。塔身は直径 14.5m で、高さ 13m が遺存しています。正面に確認できる穴は盗掘穴です。２世紀のクシャーナ朝（Kushan）のカニシカ王（Kanishka）の時の建立ともいわれる仏塔です。

ズルマラ仏塔は盗掘や風化による劣化が進行しており、立正大学では、保存・修復のための基礎調査にも取り組んでいます。

図 54　ズルマラ仏塔

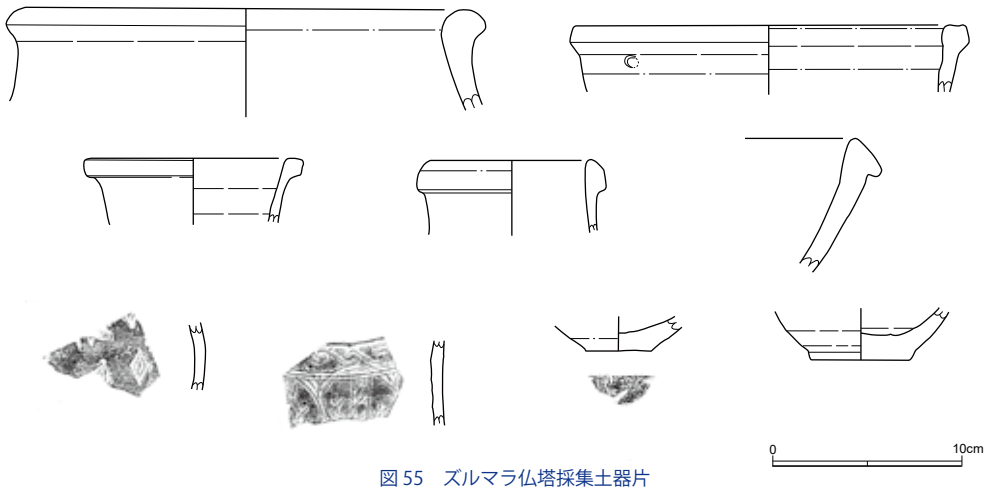

図 55　ズルマラ仏塔採集土器片

カンピル・テペ（Kampyr-Tepe）

カラ・テペ遺跡の所在地からアムダリヤ川を20km下った北岸に位置する城塞跡です。遺跡の過半をアムダリヤ川の浸食によって欠損していますが、径250mの城壁を巡らした外城の内側に径100mの内城を構築しているのがわかります。

この遺跡は、アムダリア川の渡河地点としてテルメズが盛行する以前の要所でした。アレクサンダー大王の東征の後に地域支配のために建設された都市であるアレクサンドリア・オクシアナの比定地となっています。

図56　カンピル・テペ

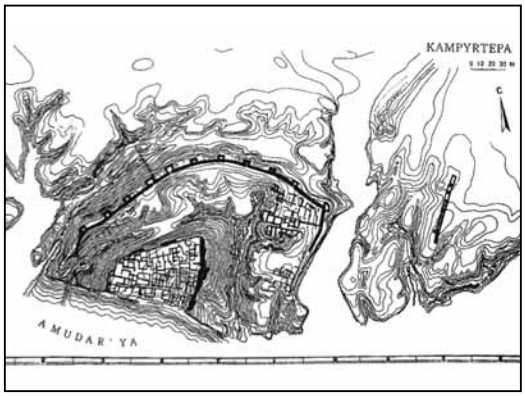

図57　カンピル・テペのプラン

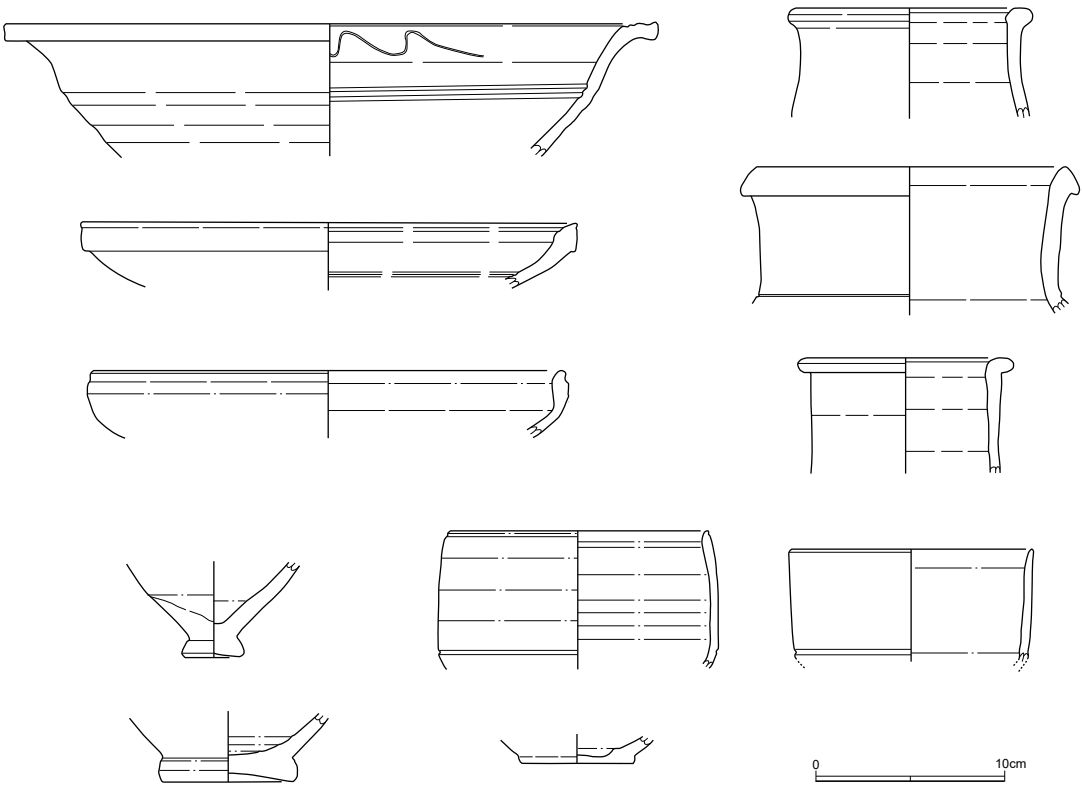

図58　カンピル・テペ採集土器片

―テルメズ考古博物館―

テルメズ駅より南西に約 800m のところに、テルメズ考古博物館があります。

テルメズ考古博物館には、カラ・テペ遺跡をはじめ、ファヤズ・テペ遺跡、カンピル・テペ遺跡や、その他の周辺に所在する遺跡の出土資料が多数展示されています。

立正大学は、すでに協定が締結されているウズベキスタン国立科学アカデミーに加え、今年度、テルメズ大学およびテルメズ考古博物館と協定を締結しました。

今後、現地の研究機関と協力した調査や学術交流の発展が期待されます。

図 59　テルメズ考古博物館

図 60　内観

図 61　カラ・テペ出土 仏像

図 62　ファヤズ・テペ出土 仏像

図 63　ズルマラ仏塔出土 人物像

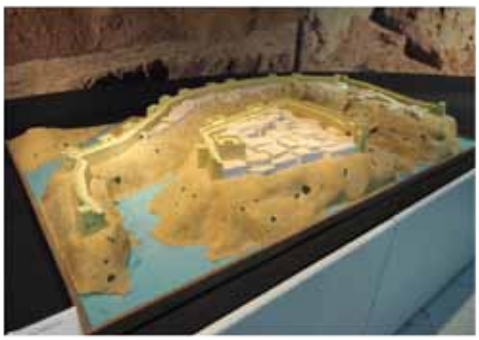

図 64　カンピル・テペ復元模型

図 65　カンピル・テペ出土 動物形土製品

参考文献
・加藤九祚 ,Sh.Pidaev 編著『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版　平成 14 年
・エドヴァルド・ルトヴェラゼ著 加藤九祚訳『考古学が語るシルクロード史 中央アジアの文明・国家・文化』平凡社　平成 23 年
・立正大学ウズベキスタン学術調査隊『カラ・テペ遺跡―2014 年度調査概要報告書―』　平成 27 年
・立正大学博物館『立正大学の海外佛跡調査―ティラウラ・コットからカラ・テペへ―』　平成 27 年
・立正大学ウズベキスタン学術調査隊『カラ・テペ遺跡―2015 年度調査概要報告書―』　平成 28 年
・岩本篤志「カラ・テペ新出文字資料と周辺遺跡―テルメズ・アンゴル地域を中心に―」『立正史学』第 119 号　平成 28 年

【立正大学博物館：第８回品川キャンパス展示】
KARA-TEPE2015　―立正大学ウズベキスタン学術調査速報―
発行日：平成 28 年 6 月 21 日
編集・発行：立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL：048-536-6150 ／ FAX：048-536-6170
E-mail：museum@ris.ac.jp　　URL：http://www.ris.ac.jp/museum/

パンフレットの下記の箇所に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

ページ（箇所）	誤	正
1（左 11 行目）	（Amudar'ja）	（Amudarya）
1（左 25 行目～右３行目）	ソビエト連邦時代による調査成果は、1960 ～ 1970 年代にかけて６冊の報告書として刊行されています。	ソビエト連邦時代から共和国創立期における調査成果は、1960 ～ 1990 年代にかけて６冊の報告書として刊行されています。
1（図２）	アム川（Amudar'ja）	アム川（Amudarya）
10（３行目、６行目）	（Fajaz-Tepe）	（Fayaz-Tepe）
10（４行目）、11（１行目）	（Zulmara-Stupa）	（Zurmala-Stupa）
13（図 62）	ファヤズ・テペ出土仏像	テルメズ出土仏像